

許嫁との婚前交渉を

言いつけられましたが、

気づけばたっぷり溺愛されていました

花室かんろ

## 注意書き

- この作品は成人向け作品です。十八歳未満の方の閲覧を固く禁じます
- ハート喘ぎ、濁点喘ぎなどを含みます
- 他者から強要された性行為の描写がありますので、苦手な方はご注意ください。現実でのそのような行為を推奨、肯定する意図はまったくございません
- 月経描写がありますので、苦手な方はご注意ください

許嫁との婚前交渉を言いつけられましたが、気づけばたつぷり潮  
愛されていました

## 第一章 私をしつけてください！

学生向けの、古いアパートの、玄関前。まいかは緊張の面持ちでイン  
ターホンを見据えていた。

まいかは今日ここで、初対面の許嫁に抱かれる。

そろそろ約束の時間だ。まだ覚悟が決まっていなくて、ぐずぐずして  
いたい、来訪を告げなければ。

ぎこちなく動く指でチャイムを押す。

「はい」

中で鍵を開ける音が聞こえて、ドアが開く。

男が出てきて、まいかをじっと見た。

明るい色の鋭い目が猛禽類を思わせて、まいかはこれから捕食される小動物のように萎縮してしまった。

「まいかちゃんだね。聞いてるよ。いらっしやい」

男はそう言ってニコツと笑った。そうするとつり気味の目が細まって、狐のような愛嬌があった。明るい色でふわふわした、後ろでちょこっと縛った髪もしっぽに思えて可愛いかもしれない。

まいかは少しだけ、ホッと息を吐いた。

「さ、入って入って」

男がお茶を用意している間、まいかは差し出された座布団にちょこんと座る。

お行儀よくしていないと、と思うが、一人暮らしの部屋、しかも男性のものとなると物珍しくて、つい見回してしまう。

「ごめんねー。迎えに行けたら良かったんだけど、今朝は集中授業があつて。迷わず来れた？」

本棚に並ぶ経済の本や辞書の背表紙を眺めていると声をかけられて、まいかは慌てて返事をする。

「は、はい！」

本当はかなり迷った。お嬢様育ちのまいかにとって、似たような学生アパートの密集するこの辺りは馴染みがなく、何度も地図アプリを開いた。

「大学生って、土曜日も授業があるんですか？」

「ううん。今日はたまたま。年に二、三回あるかないかぐらいかな」  
そう言いながら男はお茶とお菓子を持ってきた。

人一人分ぐらい離れた所に腰を下ろされ、まいかはまた固くなった。

良家の許嫁ということで想像していたお坊ちゃんとはまったく違

い、言葉を選ばなければ……少しチャラそうで、まいかの周りには少なかったタイプだ。

「ちゃんと自己紹介してなかったね。結城凜堂。大学生で、まいかちゃんの許嫁です。よろしくね」

「さ、佐伯まいかです。あ、あの……」

「ん？」

まいかが正座して、膝ごと凜堂の方を向いたので、彼は不思議そうな声を出した。

「き、今日から、よろしくお願いします！わ、私を躰けてください……」

まいかは震えながら頭を下げた。最後は消え入りそうなほど小さな声だった。

「え？しつけ？ちよっと、顔上げてよ」

今度は凜堂が慌てた様子でまいかを宥めようとした。

「えーと、まいかちゃんは今日、俺に抱かれるように言われてきたんだよね？」

「はい……」

まいかは頭を上げた。しかし凜堂と目を合わせるのは気恥ずかしくて、視線は下を向いたまま答える。

「この前誕生日で、大人になったからって。それで……凜堂さんに全



部教えてもらって、凜堂さん好みに育ててもらって、しつけてもらえ  
って」

二人の家の方針として、まいかが十八歳になったら凜堂との性交渉  
を開始させるということが決められていた。お互い性機能の不具合の  
有無を結婚前に確かめておくという理由からで、いわゆる「試験婚」  
のようなものだ。さらに、まいかが真つさらなうちに凜堂の色に染め  
られた方が、夫に従順で都合のいい妻になるだろうという父の企みも  
あった。

今から処女を失うことを、まいかはとても怖く思ったが、親同士の  
決めたことなので抵抗のしようがない。

「しつって、犬猫じゃないんだから……。それにね、俺的には今日すぐするつもりとかないし」

「へ？」

予想外の言葉にまいかと思わず顔を上げた。凜堂はまっすぐこちらを見ていた。ばっちり視線があつたのが恥ずかしくてまた目を伏せる。

「だってそうじゃない？ はじめましてで何も知らない相手にとって……そりゃ大学生ともなるとワンナイトする人とかも聞くけど、俺そういうの柄じゃないし」

「ええっ!？」

凜堂のことを、遊びにも女性にも慣れていそうだと思っていたまいかは驚きの声を上げた。

しかし失礼な態度では無かったかとおずおずと凜堂の表情を窺う。

凜堂は気にした様子でなかったのでホッと息をついた。

「だからしばらくは、こうやって会って、話したり出かけたりしようよ。お父さんたちに怒られるって言うなら口裏合わせるし」

そう言つて凜堂はニコツと笑った。懐っこい笑みにまいかは早くもほだされ始めていて、ぎこちなく笑いながら頷き返した。

「じゃあ決まりだね。今日はのんびりお喋りして、いい時間になったら解散しようか。まいかちゃんはどここの学校に通ってるんだっけ？…

…へえ！名門じゃん。宿題とか忙しくない？それなのに来てくれたんだ。ありがとう……」

凜堂が会話をリードしてくれているので、内気なまいかでも会話を続けることができた。

まずは当たり障りのない学校の話。それが終わったらもう少しパーソナルな部分に踏み込んで、好きな食べ物や趣味の話。そこからさらに発展して、今度この映画と一緒に観ようだとかを話す頃には、窓の外が夕焼け色になっていた。

「もうこんな時間か。晩ご飯食べていく？」

「いえ、そこまでお世話になるわけには……！」

まいかがブンブンと首と手を振ると、凜堂は少し眉を下げた。

「そう？ならそろそろ帰してあげたほうがいいのかな。送っていきよ」

凜堂に促されるまま、アパートの階段を下りて車に乗った。

そして宣言通り真っ直ぐまいかの家の前まで送ってくれた。

「家まで送ってくれて、ありがとうございます」

「いいんだよ。それを言うならわざわざこっちまで出向いてもらったんだし」

まいかは車から降りるために、シートベルトを外して助手席のドア

を開けようとした。

するとドアを開ける前に、凜堂がそつと腕を掴んできた。

「ごめんね、今日は何もしないって言ってたけど……キスだけ、していい？」

「へっ？」

まいかが何かを言う前に、というより凜堂の言葉を理解する前に、凜堂は身を乗り出してきた。そして……。

ちゅっ！

一瞬だけ、凜堂の唇とまいかの唇が合わさり、すぐに離れていった。

「ぴや……」

まいかは目を白黒させながら車を降りた。

「またね、まいかちゃん」

凜堂を見送ると、まいかもふわふわとおぼつかない足取りで門へと入っていった。

「ひやう……」

家に帰ってしばらくはそうして呆然としていて、自室にこもったのが功を奏したのか、家人の誰もまいかが性交の役目を果たさなかったことを疑いもしなかった。

「凜堂さん……かつこよかった……」

キスの感覚を思い出すように、唇をふにふに、と指でつつく。しかし凜堂の唇の感触が自分の指で上書きされそうで、すぐにやめた。



## 第二章 満を持して、初夜

その後、まいかと凜堂の交流が始まった。お互いの予定を見て、週末にデートを重ね、親睦も深まり、そろそろ体を許してもいいのでは……という雰囲気になってきた。

そしてついに今日、初めてのお泊まりである。

「そんなに固くならないで……って言っても無理な話か」

凜堂は苦笑しながら、ベッドの隅で縮こまるまいかを手招きした。

二人でベッドに横になっているが、まいかは壁側に寄りすぎて、も

はや壁の一部になっている。

「せめて、もうちょつとこっちおいで」

凜堂はまいかの腕を優しく掴むとまいかを自分の方に抱き寄せた。

「ぴい……」

まいかの小鳥のような情けない声に、凜堂はクスリと笑みをこぼした。そしてまいかを抱きしめて、背や腕をさすったり、ポンポンと叩いたりする。

「よしよし、何も怖がらなくていいからね」

まいかは凜堂との密着っぷりに、心臓がうるさくて仕方がない。

凜堂の手がまいかの頬に上がってきた。

「まいかちゃん、上向こっか」

有無を言わず顔を上げさせられる。

電気は消していたが、目は慣れてきたし、月明かりで十分に明るくて、凧堂の顔がはっきりと見えた。

「……ッ」

今から自分はこの人の特別になるし、この人も自分の特別になると思うと、まいかは胸がキュウッと切なくなつて、ソワソワするようにな、逃げ出したいような気持ちになった。

凧堂が顔を近づけてきたので、目をつぶらないといけないのだと思つた。

カチコチに固まったまま、でも素直に唇を差し出すと、凜堂の手が頭に添えられた。

まるで「いい子」と撫でるような手つきをして、凜堂はまいかの頭を引き寄せた。

「んっ……」

ちゅ、ちゅ、と何度か触れるだけのキスを繰り返す。しばらくすると凜堂の舌がまいかの唇を舐めた。

「……っ!？」

驚いて口を開いた隙を狙って、凜堂の舌はまいかの口内に侵入してきた。

じゅるっ♡じゅっ♡ちゅっ♡ぴちゃ……れろお……っ♡

「あ、ふ……ん……♡」

舌を絡め取って吸ったり、歯列をなぞられたりと好き勝手に口内を犯され、まいかは体がピクンピクンと跳ねるのを抑えられなかった。

体を引こうとしても、後頭部を凜堂に抑えられていて逃げられない。

しかも初めは隣同士で寝ていたはずなのに、いつのまにか凜堂の下に組み敷かれていた。

唇を離すと、凜堂は氣遣わしげな表情でまいかの頬を撫でた。

「どう？まいかちゃん。嫌じゃない？」

「え……？ひゃい……」

少し怖いのが、嫌ではない。まいかは息も絶え絶えに頷いた。

「嫌になつたらすぐ言うんだよ」

凜堂はそう言うのと、まいかが休む暇もなく首筋に唇を落とした。

「ひゃ……、ひゃ……ッ♡」

まいかのパジャマのボタンを器用に外し、胸をはだけさせる。

「やぁ……っ♡」

外気にさらされて寒さに驚いたのと、恥ずかしさで手で胸を隠す。

凜堂はまいかの腕に手を添えて、優しくどこかそうとした。

「まいかちゃん、隠さないで」

「う……はい……」

おずおずと手をどけると、凜堂はご褒美とばかりに頬にキスをしてくれた。

「ありがとう。いい子だね」

凜堂の大きな手がまいかの胸を包んで、やわやわと揉み始めた。

「ひゃあ、あ♡」

誰にも触られたことのない場所を触られて恥ずかしいはずなのに、なぜかゾクゾクして、「もっと触って欲しい」と言うように胸を突き出してしまう。

それに応えるように、凜堂が胸の頂をつまむ。

「やんっ♡！」

一際大きな声でビクンと跳ねたまいかに気をよくしたのか、凜堂の手つきは大胆になっていった。

二本の指でクリクリとつまんだり、指の腹でクニクニ押しつぶしたりされるたびに、まいかの腰が甘く疼く。

まいかは下腹部のキュウキュウする感覚をやり過ぎすために、膝を擦り合わせ始めた。

それに気づいた凜堂は、まいかのズボンの中に手を入れショーツ越しに秘部に触れた。

「ひゃんっ♡」



布越しにカリカリと引っかかされると、痺れるような感覚に襲われる。

「湿ってきた……。感じてくれてるんだね」

「あ……っ♡そんなの……♡」

凜堂の声色はとても優しく、まいかを安心させようと思ってくれていることはわかるのに、そんなことを言われると恥ずかしくてたまらない。

凜堂はショーツの中にも手を入れて、直接触り出した。

「ひゃあうううっ♡!?」

凜堂が触れた途端にゆるん！と指が滑る感覚があった。

「うわー、すごい……トロットロ。気持ちいいんだ」

凜堂はまいかのショーツを脱がすと再び肉芽に手を伸ばす。  
にゆるっ！ぬるん♡くちゅくちゅ♡

「あんっ♡！あっ！あああっ♡♡」

何度も蜜を絡めて、秘芽に擦り込むように練られる。

ずぷ……っ♡

何かが入り込む感覚があった。

凜堂が指をまいかの蜜壺に侵入させたのだ。

「ッ♡♡、ッ♡♡!？」

まいかは目の前がチカチカして、ぎゅっと拳を握った。

「まいちゃん？痛い？抜こうか？」

急に静かになったまいかを心配するように、凜堂が覗き込んだ。まいかは首を横にブンブンと振る。

話に聞いていたより、恐れていたより痛くない。

ただただ頭が痺れるような快感のつぼみの予感がした。

「そう？じゃあちよつと動かしていい？」

凜堂はホッとしたように息をつくと、指をピストンさせ始めた。

「あっあっあっ♡」

初めはゆっくりと探るように、まいかが痛がっていないと分かったら少しずつ早めたり、指を増やしたりしていく。

ぐちゅっ♡ぐちゅっ♡ずりゅっ♡

入り口の上壁をずりずり♡と指の腹で擦られる。

「あっ♡あんっ♡」

もっとして欲しいと同時に、そこだけじゃなくて奥も触って欲しくなる。

まるでそう思っていたのがバレていたように、凜堂は再び奥まで貫き、バラバラと指を動かした。

「やんっ♡あっ、あっ、しょこ……やんっ♡!？」

それに加えて胸をちゅうちゅうと吸われ、舌で胸の蕾をこねくり回されたり、潰されたりした。